



宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校附属中学校学校だより 第26号(H22.12.17)

宮崎県都城市妻ヶ丘町27-15

TEL: 0986-23-0223 FAX: 0986-24-5884

校長 大竹 正純

質実剛健

「実力と気品をそなえ、たくましくあれ！」



第2回学校参観日

～ 協調学習への取り組み～

12月10日(金)に第2回学校参観日がありました。授業参観ならびに学級懇談等にご来校いただき有り難うございました。学級担任の思いや願い、あるいはご家庭からの要望等につきまして、限られた時間ではありますが話し合いがもたれたことと思います。また、今回の参観日は、理数科主任である井上先生より講話をいただきました。理数科の現状、今後の中学生の勉強のあり方など、とても参考になるお話しでした。

参観授業については、三重野先生による国語科の授業でした。内容は、「本の世界を広げよう！」ということ、今後本校の研究テーマである「**協調学習**」として実施しました。協調学習とはどんな学習でしょうか？それは、**学習者が互いの学習を助け合いながらグループ学習を進め、学習者一人ひとりが学習に対する責任を果たすことで、グループとしての目標を達成していく、協調的な相互依存学習です。**たとえば、今回の授業は、宮沢賢治の作品三作「なめとこ山の熊、虔十公園林、よだかの星」を取り上げて、子供たちにそれぞれの作品のエキスパートになってもらい、グループでの話し合い(ジグソー・クロストーク)を通じて、自分なりの納得を獲得するものです。**協調学習が目指すのは、「一時的に詰め込んで、その後忘れてしまうような知識」ではなく「活用できる知識」の獲得にあります。**なかなかレベルの高い授業でしたが、子どもたちは、やはりすごいですね。ちゃんと理解した解を発表していました。

今後、東京大学大学院の三宅教授と連携して取り組んでいきたいと思っております。保護者の皆様、今後、子どもたちがどうなるか楽しみです。



三重野先生(国語科): 参観授業の様子



(理数科主任: 井上泰二郎先生)



他人の考えを聞いたり、他人に説明したりする活動を中心にして、生徒が、活動的、構成的、対話的に学べるような授業デザインです。



社説 毎日新聞より 「国際学力テスト なんのための学力なのか」

かつて日本人は勤勉で教育熱心だと思われていたが、そんな常識に冷や水を浴びせたのが 年から始まった国際学力テスト「PISA」だった。経済協力開発機構（OECD）が義務教育終了段階の生徒を対象に3年ごとに実施している。丸暗記ではなく実際の生活の中で直面する問題に対応する力を見るテストだ。日本は 年に「読解力」が8位だったが、03年に14位、06年に15位と落ち込んだ。これが「ゆとり教育」の見直しにつながった。

今回は「読解力」が8位となり、「数学的リテラシー」や「科学的リテラシー」も少し向上した。だが上位には上海、韓国、香港、シンガポールなどアジア勢がずらりと並んだ。

「ゆとり教育路線の見直しや、読書活動の普及などに取り組んできた成果だろう」「学校現場は気を緩めず、学力の向上を図ってもらいたい」というのは読売だ。アジアの各国の台頭を指摘した上で「PISAと同じ応用力を問う問題が出される全国学力テストは有効だろう。民主党政権はコスト削減を理由に抽出方式に変えたが、全員参加方式に戻すべきだ」「見劣りしない能力をつけさせることは国の責務だろう」と政府に注文を付けている。

これに対し日経は「PISAで学力というものの全体像をつかめるわけではない。得点に一喜一憂するのも本末転倒だ」と指摘する。東京も「順位に一喜一憂する必要はない」という。

ゆとり教育とその見直しをめぐる日本の教育行政はこの10年揺れ続けてきた。朝日は「この間のどんな努力が結果に結びつき、まだ何が足りないか。今こそ詳しい検証と整理とが必要だろう」「未来に向けて腰を落ち着け、学びの質を変えてゆくとさだろう」と呼びかける。

「テストを受けた生徒は小学校3年時から現行の『ゆとり』学習指導要領で学んでいるが、そうした中で総合学習などがどう生かされたかも検証は有用だろう」というのは毎日だ。

順位ばかりが注目されるが、上位の国と比べて日本は成績のよい子と悪い子の二極化が目立った。読書を趣味とする生徒も少ない。PISAから浮かび上がる課題を現実の教育にどう生かしていくのかが問われている。「状況を大きく前進させるには入試改革が不可欠だ。思考や表現を重視する授業を普及させるには高校・大学が手間をかけた試験を避けてはならない」と毎日は論じたが、さらに論議を深めていく必要があるだろう

上記の文章を読んで、どう感じられるでしょうか。本校では「知識や経験をもとに、自らの将来の生活に関する課題を積極的に考え、知識や技能を活用できる生徒」を育成したいと考えています。そこで、総合的な学習の時間「自然科学探究・キャリア探究」で体験的な学習を多く取り入れたり、東京大学と連携して新しい学習方法「協調学習」を取り入れたり、また宮崎大学や南九州大学との連携も行っています。さらには、読書も強く推進しています。今後の取り組みについてもご意見があれば是非お願いしたいと思います。

コ ラ ム

『自立を促すために！』

農業は、よく子育てや教育によくたとえられます。美しい花や実を育てるためには根がしっかりしていることが大切です。その根は、土質によって大きく左右されますが、人間の世界でいえば、それは家庭であり、学校だと考えます。植物は、過度に肥料や水を与えすぎて枯れてしまうし、与えなければ枯れてしまいます。また、与える時期を間違うとこれも生長に不都合を起こしてしまいます。人を人としてしっかり育てるためには、その加減と適時性が重要です。中学生の段階で、順調な成長をどこで判断したらいいのでしょうか。「あいさつができる」「返事ができる」「時間を自分でコントロールできる」

「自分のことは自分でできる」「喧嘩はするが、自分の態度を省みることができる」「周りの雰囲気気に気を遣うことができる」「任された仕事ができる」「物事に挑戦できる」等々、

個々人で判断基準は違うと思いますが身につけられたらいいですね。私たち大人の役割は、子どもが社会に出たときに困らないように、まずは身の回りのことを自分自身でできるようにしてあげることだと思います。子どもに対して自立を促す言動を、家庭でも学校でも意識していきたいものです。

